（第3種郵便物認可）

オンリーワン Only One

岡村喬生の国民オペラ

日本独自の作品つくる

11月30日、東京都内で開かれたオペラドキュメンタリー「プッチーニに挑む」の上映会。プッチーニ「蝶々夫人」の改訂版上演に情熱を燃やし、若手歌手の発掘・育成や資金集めに奔走するベテラン声楽家の姿に、会場からは惜しみない拍手が送られた。

2003年に東京で初演された改訂版は、仏前で八百万の神々に祈る場面など、それまで日本文化が誤認されていた歌詞や設定を自ら修正した。演出も手掛け、すべて日本人キャストで上演した。自国の文化に則した物語を、母国語の台本で、その国の作曲家や演出家、歌手らが作り上げる「国民オペラ」への、挑戦の始まりだった。

「国内で上演されるオペラは本場イタリアやドイツの作品が大半だが、ロシアやハンガリー、チェコなどではすばらしい国民オペラが生まれている。今こそ、西洋からの借り物ではない、日本独自の作品が必要なのです」

江要介さんや俳優の江守徹さんらと、NPO法人「みんなのオペラ」を設立して副理事長・芸術総監督に就任。上質でありながら安価で、誰もが楽しめる日本のオペラ作りを目指し、活動を始めていた。

改訂版「蝶々夫人」の手ごたえを弾みに、06年、「国民オペラ」上演にこぎ着ける。山本周五郎の短編小説「嘘つかねえ」「ほたる放生」を原作とした「人情歌物語　松とお秋」。04年から試演、改訂を重ねた2幕、約2時間のモノオペラ（歌手1人によるオペラ）だ。

台本、演出から歌、語りまで一手に担い、演じる役柄は女性も含めて全9役に上る。

＊増田教三撮影

安酒で憂さ晴らしする松の心情を熱く歌い上げる（2009年6月、「松とお秋」東京公演）

音楽は作曲家、大中恩さんが担当し、演奏楽器は、クラリネットとピアノだけ。舞台装置も簡素化し、料金は4000円に抑えた。

「オペラは、老若男女みんなが楽しめる内容であるべきです。江戸時代の庶民の人情や喜怒哀楽を描いたこの作品世界は、落語や浪曲など古典芸能でも描かれてきたもので、日本オペラに最適と考えました」。広島や静岡などで地方公演も行い、今も再演を重ねる代表作となった。

新聞記者を志して入学した早稲田大学政経学部時代、声の大きさを買われてグリークラブに誘われたのが、声楽家の道を歩むきっかけだった。28歳でイタリアに留学、以降、20年間にわたってバス歌手としてオーストリアやドイツの歌劇場をはじめ、ヨーロッパ各地で活躍した。

「海外生活から、自国のオペラを生み育てることの大切さを学んだ。残りの人生を懸け、国民オペラに取り組みますよ」。オペラの初舞台を踏んでから半世紀余り。挑戦はこれからも続く。

奥田祥子

おかむら・たかお　1931年、東京都生まれ。60年、伊・ビオッティ国際音楽コンクール金賞。2011年、イタリアで「蝶々夫人」を上演、改訂版への取り組みが評価され、プッチーニ国際賞を受賞した。

＊近況　モノオペラ「人情歌物語　松とお秋」を14日、早稲田大音楽同攻会主催で約80席の小規模ハウスで上演し、盛況に終わった。14年も同作再演やドキュメンタリー「プッチーニに挑む」上映を続ける予定で、「観客との距離が近い100人前後のスペースでも行いたい」。イタリアオペラなどのアリアや歌曲のリサイタルのほか、執筆、講演活動にも意欲を見せる。